

小森 淳子

1. はじめに

スワヒリ語では、ある種の人の状態を表すのに、下のように一つの動詞に対して二通りの表現が可能である。

- | | | | | |
|-------|----------------|-------------------|----------------------|-----------------|
| (1)a. | Koo | li-me-m-kauka | Kurwa. ¹⁾ | 「クルワの喉は乾いている。」 |
| | 喉 _i | i | j 乾く j | |
| b. | Kurwa | a-me-kauka | koo. | 「クルワは喉が乾いている。」 |
| | i | i | 乾く 喉 | |
| (2)a. | Mguu | u-li-ni- | vimba. | 「私の足は腫れた。」 |
| | 足 _i | i | j(1.s) 腫れる | |
| b. | Ni- | li-vimba | mguu. | 「私は足が腫れた。」 |
| | i(1.s) | 腫れる | 足 | |
| (3)a. | Jasho | li-na-m-toka | Fuad. | 「ファッドから汗が出ている。」 |
| | 汗 _i | i | j 出る j | |
| b. | Fuad | a-na-toka | jasho. | 「ファッドは汗をかいている。」 |
| | i | i | 出る 汗 | |
| (4)a. | Machozi | ya-na-m-chiririka | mtoto. | 「子供から涙があふれている。」 |
| | 涙 _i | i | j 滴る 子供j | |
| b. | Mtoto | a-na-chiririka | machozi. | 「子供は涙があふれている。」 |
| | i | i | 滴る 涙 | |

それぞれ a.も b.も同じ事象を表しているが、二つの文は統語的に異なっている。a. b. どちらにも、その状態がみられる「人」と「部分」が現れているが、動詞の形は同じで、主語（主辞と一致する名詞句）が異なっているのである。a. では、その状態がみられる「部分」が主語で、「人」は客辞と一致する形で表されている。一方 b. では、「人」が主語で、「部分」は動詞の後ろに置かれているが、客辞との一致はみられない。このように動詞の形が変わらないで主語が交替している二つの文を指して、主語交替現象と呼ぶことにする。

本稿では、主語交替現象はどのような場合にみられるのか、それは、どのような統語的要因によるものなのかを、他の場合の主語交替現象 - Locative inversion と呼ばれる現象、及び、「物」の状態を表す文にみられるもの - と併せて考える。さらに、Locative inversion や「物」の状態文の場合と比較して、「人」の状態文が他の場合と特に異なる点を観察し、「人」の状態文の特徴的な点を明らかにするものである。

2. スワヒリ語の主語交替現象

スワヒリ語にみられる主語交替現象は、(1)-(4)のように「人」の状態を表す文の他に、形態的にみてさらに二つの場合がある。一つは一般に、Locative inversionと呼ばれているものであり、もう一つは、「人」の状態文と同じような交替を示す「物」の状態文である。いずれも「人」の状態文と同様、動詞の形が変わらないまま主語が文中の別の名詞句と交替する現象がみられる。以下に、これら二つの場合についてみる。

2.1 Locative inversion

Locative inversion (以下、LI) は他のバントウ諸語にもみられる現象であるが、下の例のように「場所」クラスの名詞句²⁾を主辞と一致させ、動詞の後ろの名詞句を提示する文を作る操作をいう。主語が「場所」クラスの名詞句になるので、このように呼ばれている。下の例のb.がinversionした文である。

- (5)a. Wanyama wa-me-lala mwitu-ni.
動物 i i 眠る 森 L
「動物が森の中で眠っている。」
- b. Mwitu-ni m-me-lala wanyama.
森 i L i 眠る 動物
「森の中では動物が眠っている。」
- (6)a. Watu wengi wa-me-kufa kule mji-ni.
人 i 多い i 死ぬ あの 町 L
「多くの人があのだで死んだ。」
- b. Kule mji-ni ku-me-kufa watu wengi.
あの 町 i L i 死ぬ 人 多い
「あのだでは多くの人があで死んだ。」
- (7)a. Kiwingu cha moshi ki-li-tanda pale uwanja-ni.
雲 i of 煙 i 広がる その 広場 L
「一塊の煙がその広場に広がった。」
- b. Pale uwanja-ni pa-li-tanda kiwingu cha moshi.
その 広場 i L i 広がる 雲 of 煙
「その広場には一塊の煙が広がった。」
- (8)a. Kiti ki-li-sukum-w-a chini ya meza.³⁾
いす i i 押す PS 下 of 机
「いすが机の下に入れられていた。」
- b. Chini ya meza ku-li-sukum-w-a kiti.
下 i of 机 i 押す PS いす
「机の下にはいすが入れられていた。」
- (9)a. Majambia ya-li-tundik-w-a ukuta-ni.
短剣 i i 掛ける PS 壁 L
「短剣が壁に掛けられていた。」
- b. Ukuta-ni ku-li-tundik-w-a majambia.
壁 i L i PS 短剣

「壁には短剣が掛けられていた。」

a.では、動詞の状態がみられる対象物 (patient) を表す名詞句が、b.では、「場所」を表す名詞句が、それぞれ主語になっている。b.の文では、主辞が「場所」クラスであれば、場所を表す名詞句は必ずしも現れる必要はない。例えば、下のLI文をみよう。

(10) Ku-me-tup -w-a wavu na samaki wengi wadogo wadogo wa-me-patikanana.
 投げる PS 網 & 魚 多い 小さい 捕まる
 「捜査網が敷かれていて雑魚がたくさん捕まっているんだ。」

(11) Jua li-na-tua ha-pa-ku-bakia mtu ila wawili au watatu tu.
 太陽 沈む 否 残る 人 以外 二人 or 三人 だけ
 「太陽が沈んで、二、三人しか残っていなかった。」

(10)の主辞 ku- と(11)の主辞 pa- はそれぞれ「場所」クラスの主辞であるが、文中にこれらの主辞と一致する主語名詞句は現れていない。(10)の Ku- は特定の場所ではなく漠然とした場所や時を指し、(11)の pa- は物語の舞台となっている場所を指しているの、いずれもその場所を主語名詞句を用いて明示する必要がないのである。必要なのは、対象物である名詞句 ((10)ではwavu「網」、(11)ではmtu「人」) である。厳密に言えば、LIは場所の名詞句がその位置を交替する現象というよりも、対象物である名詞句がその位置を交替する現象なのである。

2.2 「物」の状態文

「物」の状態文では、(1)-(4)の「人」と「部分」のように、「物」と「部分」の名詞句がそれぞれ主語になる。下は、a.では「部分」が、b.では「物」が、それぞれ主語になっている例である⁴⁾。

(12)a. Maji ya-me-kauka mto-ni. 「川では水が乾いている。」
 水 i i 乾く 川 L

b. Mto u-me-kauka maji. 「川は水が乾いている。」
 川 i i 乾く 水

(13)a. Maji ya-na-chiririka ndoo-ni. 「水がバケツから滴っている。」
 水 i i 滴る ハケツ L

b. Ndoo i-na-chiririka maji. 「バケツは水が滴っている。」
 ハケツ i i 滴る 水

(14)a. Damu zi-na-toka kwenye kidole chake. 「彼の指から血が出ている。」
 血 i i 出る の所で 指 his

b. Kidole chake ki-na-toka damu. 「彼の指は血が出ている。」
 指 i his i 出る 血

(15)a. Wino u-me-kwisha kwenye kalamu hii. 「このペンではインクがなくなった。」
 インク i i 尽きる の所で ペン この

b. Kalamu hii i-me-kwisha wino. 「このペンはインクがなくなった。」
 ペン i この i 尽きる インク

- (16)a. Nywele zi-me-eneā mgongo-ni mwake. 「髪が彼女の背中に広がっている。」
 髪 i i 広がる 背中 L her
- b. Mgongo wake u-me-eneā nywele. 「彼女の背中は髪が広がっている。」
 背中 i her i 広がる 髪
- (17)a. Damu zi-me-tapakaa nyumba-ni kwenu. 「血があなた達の家に飛び散っている。」
 血 i i 飛び散る 家 L your
- b. Nyumba yenu i-me-tapakaa damu. 「あなた達の家は血が飛び散っている。」
 家 i your i 飛び散る 血

a. のように「部分」が主語のとき、「物」の名詞句は場所を示す接尾辞 -ni や前置詞 kwenye などの locative marker を伴って現れる⁵⁾。一方、b. のように「物」が主語のとき、「部分」の名詞句は無標 (locative marker や客辞を伴わない形) で動詞の後ろに置かれる。

「物」の名詞句が動詞の後ろの位置では locative marker を伴うにもかかわらず、主語になるとき無標の形で表されるのは、「物」を、いわば TOPIC (話題句) として取り上げ、「場所」としてではなく、その「物」自体について何らかの状態を述べる文になっているためだといえる。

2.3 統語的特徴

2.3.1 i(nverted)-subject

以上みてきた三つの主語交替現象の例に共通してみられる特徴は、生起する二つの名詞句のうち、一つは必ず動詞の直後の位置に無標で現れるということである。この名詞句を仮に、i(nverted)-subject⁶⁾と呼ぶならば、「人」や「物」の状態文では「部分」の名詞句が、LI文では対象物である名詞句が、それぞれ i-subject となっている。LI文においては i-subject がその動詞の必須項であり、これが欠けた文は成り立ち得ない。

- (18)a. Mwitū-ni m-me-lala *φ / wanyama.
 森 i L i 眠る 動物
 「森の中では、*φ / 動物が 眠っている。」
- (19)a. Kule mji-ni ku-me-kufa *φ / watu wengi.
 あの 町 i L i 死ぬ 人 多くの
 「あの町では、*φ / 多くの人が 死んだ。」
- (20)a. Chini ya meza ku-li-sukum-w-a *φ / kiti.
 下 i of 机 i 押す PS 椅子
 「机の下には、*φ / 椅子が 入れられていた。」
- (21)a. Ukuta-ni ku-li-tundik-w-a *φ / majambia.
 壁 i L i 掛ける PS 短剣
 「壁には、*φ / 短剣が 掛けられていた。」

これに対して、「人」や「物」の状態文では、LI文のように i-subject のみが必須項だとは言い切れないが、これらの状態文にみられる動詞も、その状態がみられる

対象物のみをとる一項文が可能である。

- (22)a. Koo la Kurwa li-me-kauka. 「クルワの喉は乾いている。」
 喉_i of _i 乾く
- b. Mguu wangu u-li-vimba. 「私の足が腫れた。」
 足_i my _i 腫れる
- c. Machozi ya-na-chiririka. 「涙が滴っている。」
 涙_i _i 滴る
- d. Maji ya ndoo ya-na-chiririka. 「バケツの水が滴っている。」
 水_i of ハケツ _i 滴る
- e. Wino wa kalamu hii u-me-kwisha. 「このペンのインクはなくなった。」
 インク_i of ペン この _i 尽きる

このように主語交替現象がみられる動詞は、対象物である名詞句を一項だけ必要とする一項動詞である。このことをさらに確かめるために、一項動詞であることが形態的に明らかな状態形 (stative form) の例をみてみよう。

状態形は動詞語根に派生接辞 -k を付けてつくる。状態形の基本的な意味は、「状態(stative)」と「可能(potentiality)」の二つであり (Ashton(1947), p.227)、他動詞は状態形になることによって必要な項が二項から一項になるのが普通である。下に他動詞とその状態形を対にした例を示す。

- (23)a. Mtoto a-li-u-vunja mlango. 「子供がドアを壊した。」
 子供_i _i j 壊す ドア_j
- b. Mlango u-me-vunj-ik-a. 「ドアは壊れている。」
 ドア_i _i 壊す ST
- (24)a. Baba a-li-u-kata uzi. 「父が糸を切った。」
 父_i _i j 切る 糸_j
- b. Uzi u-me-kat -ik-a. 「糸は切れている。」
 糸_i _i 切る ST
- (25)a. Mtu yule a-li-li-pasua gurudumu. 「あの男がタイヤを裂いた。」
 男_i あの _i j 裂く タイヤ_j
- b. Gurudumu li-me-pasu-k-a. 「タイヤは裂けている。」
 タイヤ_i _i 裂く ST

a. は典型的な他動詞文で、二項を必要としているが、b. のように動詞が状態形になると、行為者 (agent) は動詞にとっての必須項ではなくなり、必要な項はその状態がみられる対象物の一項だけになる。動詞がこの状態形の場合にも主語交替現象がみられる。(23)b. -(25)b. における主語交替現象の例をみてみよう。

- (26)a. Mlango u-me-vunj-ik-a kwenye nyumba hii. 「この家ではドアが壊れている。」
 ドア_i _i 壊す ST の所で 家 この
- b. Nyumba hii i-me-vunj-ik-a mlango. 「この家はドアが壊れている。」
 家_i この _i 壊す ST ドア

(27)a. Gurudumu li-me-pasu-k-a kwenye gari hii.
 タイヤ_i i 裂く ST の所で 車 この
 「この車ではタイヤが裂けている。」

b. Gari hii i-me-pasu-k-a gurudumu.
 車_i この i 裂く ST タイヤ
 「この車はタイヤが裂けている。」

(28)a. Uzi u-me-kat -ik-a kwenye kishada hiki.
 糸_i i 切る ST の所で 瓶 この
 「この瓶では糸が切れている。」

b. Kishada hiki ki-me-kat -ik-a uzi.
 瓶_i この i 切る ST 糸
 「この瓶は糸が切れている。」

このように、形態的に一項動詞であることが明かな状態形の場合にも主語交替現象がみられることから、主語交替現象は必要とする項が一項である状態動詞において、i-subjectが主語の位置と動詞の後ろの位置を交替している現象だといえる。

2.3.2 Unaccusativity

2.3.1でみたように、主語交替現象は、状態動詞文においてi-subjectがその位置を交替している現象である。i-subjectが主語としてあらわれている場合、その統語関係は明白だが、動詞の後ろにおかれている場合はどうだろうか。後者の場合の統語的な特徴をみてみよう。

バントウ諸語の統語論で目的語の統語テストとして用いられるものには、語順、客辞との一致、受動化の三つがある (Kisseberth & Abasheikh (1977)、Hyman & Duranti (1982) etc.)。これらのテストを(29)で具体的にみてみよう。

(29)a. Bwana Msa a-li-kunja barua hiyo. (語順)
 i i 折り畳む 手紙 その
 「ムーサ氏はその手紙を折り畳んだ。」

b. Bwana Msa a-li-i-kunja barua hiyo. (客辞との一致)
 i i j 折り畳む 手紙j その
 「ムーサ氏はその手紙を折り畳んだ。」

c. Barua hiyo i-li-kunj-w -a na Bwana Msa. (受動化)
 手紙_i その i PS by
 「その手紙はムーサ氏によって折り畳まれた。」

当該の名詞句 (barua hiyo「その手紙」) が目的語であるかどうかは、動詞の直後にくることができるか(29.a)、一致する客辞をとることができるか(29.b)、また受動文で主語になることができるか(29.c)、といったテストによって判断されるのである。

これらのテストを動詞の直後の位置にあるi-subjectに適用してみよう。まず、語順のテストでは、副詞の挿入や語順の入れ替えによってi-subjectが動詞の直後の位置を離れると非文になることがわかる。

- (30)a. *Kurwa a-me-kauka kabisa koo. (←1.b)
 i i 乾く 完全に 喉
- b. *Mguu ni-li-vimba. (←2.b)
 足 1.s 腫れる
- c. *Mwitu-ni m-me-lala fofofo wanyama. (←5.b)
 森i i 眠る ぐっすり 動物
- d. *Kule mji-ni watu wengi ku-me-kufa. (←6.b)
 あの 町i L 人 多い i 死ぬ
- e. *Ndoo i-na-chiririka ndo ndo ndo maji. (←13.b)
 ハケツ i i 滴る ホタ ホタ 水

つまり語順に関しては、動詞の直後の位置を離れることができないという目的語の特徴を示しているといえる。

これに対して、客辞との一致、受動化の点ではその基準に当てはまらない。(31)では、動詞の後ろにくるi-subjectが一致する客辞をとれないことを示している。

- (31)a. *Kurwa a-me-li-kauka koo.
 i i J 乾く 喉J
- b. *Ni-li-u-vimba mguu.
 1.s J 腫れる 足J
- c. *Mwitu-ni m-me-wa-lala wanyama.
 森i L i J 眠る 動物J
- d. *Kule mji-ni ku-me-wa-kufa watu wengi.
 あの 町i L i J 死ぬ 人J 多い
- e. *Ndoo i-na-ya-chiririka maji.
 ハケツ i i J 滴る 水J

また、動詞の後ろにあるi-subjectを主語とする受動文も不可である。

- (32)a. *Koo li-me-kauk-w-a na Kurwa.
 喉i i 乾く PS by
- b. *Mguu u-li-vimb -iw-a na mimi.
 足 i 腫れる PS by 私
- c. *Maji ya-na-chiririk-w-a na ndoo.
 水i i 滴る PS by ハケツ

つまりi-subjectは、客辞との一致、受動化の点では目的語とはいえないが、動詞の直後の位置を離れることができないのである。これは、Perlmutter (1978) ⁷⁾ 以来提唱されている unaccusative object (非対格目的語) を思わせる。Unaccusative objectとは、ある種の自動詞において、表層で主語になることのできる基底での目的語である。上でみた目的語のテストからもわかるように、i-subjectは目的語の位置には生起するが、accusative を与えられない、つまり客辞との一致と受動化において目的語の特徴を示さないのである。また、前節でみたように、主語交替現象は一項のみを必要とする状態動詞にみられる。しかも、その動詞は非意志的な状態を表し、項として行為者 (agent) ではなく、対象物 (patient) をとる。まさに、Perlmutter (1978) で示されているunaccusative動詞において、主語交替現象がみ

られるのだといえよう。動詞の直後の位置に現れている i-subject は、"initial 2" (基底の目的語) の位置に生起している unaccusative object であり、主語の位置に現れている i-subject は、"final 1" (表層の主語) の位置に生起している Unaccusative object だといえよう。

2.3.3 受動化の問題

Perlmutter (1978) では、unaccusative 動詞は受動化できないという結論が出されている。1-Advancement Exclusiveness Law (主語への昇格は一回限りという仮説) によって、unaccusative object が主語に昇格した後に、さらに何か他の要素が主語に昇格すること (つまり受動化されること) はできないというわけである。ところが、ここでみている交替現象の起こる動詞のうち、特に「人」や「物」の状態を表す動詞は受動化が可能である。

- (33)a. Kurwa a-me-kauk-w-a na koo. 「クルワは喉が乾いている。」
i i 乾く PS by 喉
- b. Ni-li-vimb -iw-a na mguu. 「私は足が腫れた。」
1.s 腫れる PS by 足
- c. Fuad a-na-tok-w-a na jasho. 「ファッドは汗をかいている。」
i i 出る PS by 汗
- (34)a. Mto u-me-kauk-w-a na maji. 「川は水が乾いている。」
川 i i 乾く PS by 水
- b. Ndoo i-na-chiririk-w-a na maji. 「バケツは水が滴っている。」
ハケツ i i 滴る PS by 水
- c. Kidole chake ki-na-tok -w-a na damu. 「彼の指は血が出ている。」
指 i 彼の i 出る PS by 血

(33)(34)はそれぞれ、「人」と「物」の状態を受動文で表している。これらの受動文は統語的にみて、「部分」の名詞句が主語となっている能動文から派生された受動文だと考えることもできる。しかし、unaccusative 動詞にそのような派生が認められないとすれば、これらの受動文をどのように解釈すればいいだろうか。ここでは、典型的な他動詞の受動文との相違点を見ることにより、状態動詞の受動文が他動詞の受動文とは異なることを示す。

状態動詞の受動文は、典型的な他動詞の受動文とは次の二点で異なる。一つは、典型的な他動詞の受動文では、動作主をあらわす na 句が随意的であるのに対して、状態動詞の受動文では na 句が義務的なことである。

- (35)a. Mtoto a-li-pig -w-a na Juma. 「子供はジュマに殴られた。」
子供 i i 殴る PS by
- b. Mtoto a-li-pig -w-a. 「子供は殴られた。」
i i 殴る PS

- (36)a. Mtoto a-na-chiririk-w-a na machozi. 「子供は涙があふれている。」
 i i 滴る PS by 涙
 b. *Mtoto a-na-chiririk-w-a.
 i i 滴る PS

もう一つは、典型的な他動詞の受動文は使役構文に埋め込むことができないが (Givon (1976) 参照)、状態動詞の受動文は使役構文に埋め込むことができるという点である。ここでみる使役構文は、使役動詞 *fanya* を用い、*causee* を主文の目的語にとり、埋め込み文の動詞を接続法 (subjunctive) にする形で表される。典型的な他動詞文の埋め込みの例は次のようになる。

- (37)a. Juma a-li-m-piga mtoto.
 i i j 殴る 子供j
 「ジュマが子供を殴った。」
 b. Mama a-li-m-fanya [Juma a-m-pig -e mtoto].
 i i j させる j j k 殴る SB 子供k
 「お母さんはジュマに子供を殴らせた。」

しかし、他動詞の受動文は使役構文に埋め込むことができない。

- (38)a. Mtoto a-li-pig -w -a na Juma.
 子供i i 殴る PS by
 「子供はジュマに殴られた。」
 b. *Mama a-li-m-fanya [mtoto a-pig -w -e na Juma].
 i i j させる 子供j j 殴る PS SB by

それに対して、状態動詞の受動文は埋め込むことができる。

- (39)a. Fuad a-li-chiririk-w -a na machozi.
 i i 滴る PS by 涙
 「ファッドは涙があふれた。」
 b. Moshi u-li-m-fanya [Fuad a-chiririk-w -e na machozi].
 煙i i j させる j j 滴る PS SB by 涙
 「煙でファッドは涙があふれた。」 (lit. 煙がファッドに涙をあふれさせた。)
 (40)a. Najum a-li-tok -w -a na jasho.
 i i 出る PS by 汗
 「ナジュムは汗が出た。」
 b. Joto i-li-m-fanya [Najum a-tok -w -e na jasho].
 熱i i j j 出す PS SB by 汗
 「暑さでナジュムは汗が出た。」 (lit. 暑さがナジュムに汗を出させた。)

他動詞の場合、(37)のように能動文は使役構文に埋め込むことができるが、(38)のように受動文は埋め込みが不可である。しかし状態動詞の受動文は、(39)(40)のように埋め込みが可能である。

状態動詞の受動形は、形態的には受動形であっても受動の意味を表さず、その受動文は統語的にも他動詞の受動文とは異なるものだといえる。つまり、他動詞の受動文の様に昇格によって作られるものとは異なる受動文だと考えることができる⁸⁾。

3. 「人」の状態文の特徴

前章において、主語交替現象は動詞の意味、必須項の数、i-subjectの統語的な特徴などから、unaccusative動詞にみられる現象だと考えた。つまり、unaccusative objectであるi-subjectが、主語の位置と動詞の直後の位置の両方に生起し得るために起こるのが、主語交替現象だといえよう。

ところで、「人」の状態文では、そのi-subject（「部分」を表す名詞句）が「物」の状態文やLI文のi-subjectとは異なる特徴をもつことが観察される。一つは、「人」の状態文のi-subjectには意味的な制限があること、もう一つは、関係節化による抜き出しの可否に関して、その統語的な振る舞いが異なることである。以下にこれらの点について述べる。

3.1 意味的制限

「人」の状態文の場合、i-subjectは人の「部分」を表すものだが、それには意味的な制限がみられる。即ち、「人」の状態文に現れるi-subjectは、「人」の譲渡不可能な所有物でなければならないという制限である。「人」の状態文において、動詞の後ろの位置にあるi-subjectが、譲渡不可能な所有物である場合とそうでない場合を対にして比べた例を見てみよう。

- (41)a. Saada a-me-potea fahamu. 「サアッダは意識がなくなった。」
 i i なくなる 意識
- b. *Saada a-me-potea pete.
 i i なくなる 指輪
- (42)a. Yule kijana a-li-anguka mdomo wa chini. 「その若者は下唇が垂れた。」
 その 若者i i 落ちる 唇 of 下
- b. *Yule kijana a-li-anguka gazeti.
 その 若者i i 落ちる 雑誌
- (43)a. Mariam a-me-zidi wasiwasi. 「マリウムは心配がつのった。」
 i i 増す 心配
- b. *Mariam a-me-zidi mali.
 i i 増す お金
- (44)a. Yule mwizi a-me-tuna mashavu. 「その泥棒は頬が膨れていた。」
 その 泥棒i i 膨れる 頬
- b. *Yule mwizi a-me-tuna mkoba.
 その 泥棒i i 膨れる カバン

それぞれの例で、b.のi-subjectが不可なのは、主語の「人」にとって譲渡不可能な所有物ではないからである⁹⁾。

上の(41)-(44)で示されているように、i-subjectが動詞の後ろにある場合、それは常に「人」の譲渡不可能な所有物でなければならない。しかし一方、i-subjectが主語である場合、動詞によっては譲渡可能な所有物でも可能な場合がある。(41)のpete「指輪」や(42)のgazeti「雑誌」は、譲渡可能な所有物であるにもかかわらず、

主語になることができるのである。一方、同じように譲渡可能な所有物である(43)の mali「お金」や(44)の mkoba「カバン」は、動詞の後ろの位置で不可であったのと同様、主語になることもできない。

- (41)'a. Fahamu i-me-m-potea Saada. 「意識がサアツダからなくなった。」
 意識i i j なくなる j
- b. Pete i-me-m-potea Saada. 「指輪がサアツダからなくなった。」
 指輪i i j なくなる j
- (42)'a. Mdomo wa chini u-li-m-anguka yule kijana. 「下唇がその若者から垂れた。」
 唇i of 下 i j 落ちる その 若者j
- b. Gazeti li-li-m-anguka yule kijana. 「雑誌がその若者から落ちた。」
 雑誌i i j 落ちる その 若者j
- (43)'a. Wasiwasi u-me-m-zidi Mariam. 「マリウムは心配がつのった。」
 心配i i j 増す j
- b. *Mali zi-me-m-zidi Mariam.
 お金i i j 増す j
- (44)'a. Mashavu ya-me-m-tuna yule mwizi. 「その泥棒は頬が膨れていた。」
 頬i i j 膨れる その 泥棒j
- b. *Mkoba u-me-m-tuna yule mwizi.
 カバンi i j 膨れる その 泥棒j

(41)'b.(42)'b.の例で、i-subjectが譲渡可能な所有物であるにもかかわらず主語になることができるのは、(41)'(42)'に生起している「人」の意味役割に起因していると考えられる。(43)'(44)'の例では、「人」は経験者(experiencer)であり、あくまでも「人」が、動詞の表す状態の主体であるため、主語の名詞句がこの「人」と非関与的なもの - 譲渡可能な所有物 - であれば非文となるのである。それに対して(41)'(42)'では、主語である「部分」が、動詞の表す状態の主体であり、「人」はその状態の経験者ではなく、起点(source)を表しているのである。ここで、(41)'(42)'はすでに「人」の状態文ではなく、主語になっている物の状態を表す文になっていることに気付く。(41)'(42)'の例にみられる動詞は、客辞と一致している「人」が、「経験者」ではなく「起点」を表すような移動動詞だといえよう。つまり移動動詞の場合、真の「人」の状態文といえるのは、(41)'(42)'のように「部分」が主語になっている文ではなく、「人」が主語である(41)(42)の文だけである。それ故、移動動詞文では、(41)(42)の様に、動詞の後ろのi-subjectにのみ、譲渡不可能な所有物でなければならないという意味的制限がかかるのである。

3.2 統語的相違点

「人」の状態文にみられるi-subjectは、意味的にだけでなく統語的にも「物」の状態文やLI文のi-subjectと異なる。ここでは、i-subjectの関係節化による抜き出しを例に、「人」の状態文のi-subjectが他の場合のi-subjectと異なることをみる。

スワヒリ語の関係節は、headとなる名詞句を前置し、この名詞句に一致する関係

辞 (relative prefix) を動詞語根の前に付けて作る¹⁰⁾。

- (45)a. Msichana a-na-andika makala kwa bidii.
少女_i i 書く 論文 一生懸命に
「少女は一生懸命に論文を書いている。」

- b. Msichana a-na-ye-andika makala kwa bidii
少女_{i,r} ¹¹⁾ i r 書く 論文 一生懸命に
「一生懸命に論文を書いている少女」

- c. Makala a-na-yo-andika msichana kwa bidii
論文_r i r 書く 少女_i 一生懸命に
「少女が一生懸命に書いている論文」

(45.a)の文から、msichana (少女) と makala (論文) をそれぞれ head として抜き出し、動詞語根の前にそれらと一致する関係辞 (ye-, yo-) を挿入することによって、(45.b,c)の関係節が作られている。

ここで、i-subjectの関係節化をみてみよう。LI文や「物」の状態文に現れる i-subject は、動詞の直後の位置からは、head として抜き出すことはできない。(46)(47)はLI文、(48)(49)は「物」の状態文の例である。

- (46)a. Nyumba-ni kwa Ali pa-li-toka nyoka. 「アリの家から蛇が出てきた。」
家_i L of i 出る 蛇

- b. *Nyoka pa-li-yo-toka nyumba-ni kwa Ali
蛇_r i r 出る 家 L of

- (47)a. Pembe-ni pa-li-wek -w-a yai viza. 「角には腐った卵が置かれていた。」
角_i L i 置く PS 卵 腐った

- b. *Yai viza pa-li-lo-wek -w-a pembe-ni
卵_r 腐った i r 置く PS 角_i L

- (48)a. Gogo lile li-na-bubujika unga. 「あの丸太は粉を吹いている。」
丸太_i あの i 湧く 粉

- b. *Unga li-na-o-bubujika gogo lile
粉_r i r 湧く 丸太_i あの

- (49)a. Birika i-na-chemka maji. 「やかんは水が沸いている。」
やかん_i i 沸く 水

- b. *Maji i-na-yo-chemka birika
水_r i r 沸く やかん_i

LI文や「物」の状態文では、i-subjectが動詞の直後の位置にある文(a.)から、i-subjectをheadとして抜き出して関係節化する(b.)ことはできない¹²⁾。

一方、「人」の状態文では関係節化によるi-subjectの抜き出しが可能である。下の例は、i-subjectが動詞の直後の位置にある「人」の状態文(a.)から、i-subjectをheadとして抜き出して関係節化したもの(b.)である。

- (50)a. Fuad a-na-toka jasho. (=3.b) 「ファッドは汗をかいている。」
i i 出る 汗

- b. Jasho a-na-lo-toka Fuad 「ファッドから出る汗」
汗_r i r 出る i

- (51)a. Mtoto a-na-chiririka machozi. (=4.b) 「子供は涙があふれている。」
 子供_i i 滴る 涙_r
- b. Machozi a-na-yo-chiririka mtoto 「子供からあふれている涙」
 涙_r i r 滴る 子供_i
- (52)a. Mtoto a-me-ota meno. 「子供は歯が生えている。」
 子供_i i 生える 歯_r
- b. Meno a-na-yo-ota mtoto 「子供に生えている歯」
 歯_r i r 生える 子供_i
- (53)a. Mpenzi wangu a-na-nukia udi. 「ぼくの恋人はウディの匂いがする。」
 恋人_i my i 匂う ウディ(香木の一種)_r
- b. Udi a-na-yo-nukia mpenzi wangu 「ぼくの恋人から匂うウディ」
 r i r 匂う 恋人_i my

スワヒリ語の関係節化の可否は普通、文法関係にかかわる問題であるが、同じ*i*-subjectの関係節化の可否が異なるということは文法関係以外の要因があると考えざるを得ない。その要因として、*i*-subjectのもつ FOCUS としての機能が考えられる。一般に、LIは動詞の直後の名詞句を提示する機能 (presentative function) をもつといわれている (Bresnan & Kanerva (1989), Perez (1983))。 (46)(47)のLI文に現れている*i*-subjectは、提示された FOCUS なので、関係節化によって抜き出すことができないのである。同様に、(48)(49)の「物」の状態文でも、*i*-subjectを関係節のheadとして抜き出すことができないのは、それが FOCUS として提示されているものだからだと考えられる。そうすると、逆に(50)-(53)のように、関係節の head として抜き出すことが可能な「人」の状態文の*i*-subjectは、FOCUS として提示されているものではないといえよう。つまり、この FOCUS 機能の有無が、LI文や「物」の状態文の*i*-subjectと、「人」の状態文の*i*-subjectとを区別しているのである。

「人」の状態文の*i*-subjectは、他の*i*-subjectと同様、動詞の直後の位置に無標で現れる。しかし「人」の状態文には、LI文や「物」の状態文のように無標で動詞の後ろにおかれる名詞句を提示して示すという働きはなく、むしろ動詞と「部分」の名詞句とが一つの意味的なまとまりを成して、あくまでも「人」の状態を表そうとするものなのである。それ故に、「人」の状態文の*i*-subject、つまり「部分」の名詞句には意味的制限がかかり、また、関係節化の可否に現れている様に、動詞の直後の位置において他の*i*-subjectのような FOCUS としての機能をもたないのである。「物」の状態文は、「人」の状態文と同じ様に「物」自体の状態について述べているのであるが、それと同時に「部分」の名詞句を提示するというLI文と共通する提示機能を有しているのである。

3.3 その他の特徴

以上、3.1節、3.2節で、「人」の状態文がLI文や「物」の状態文と異なる特徴をもつことをみた。それは、動詞の直後の位置に生起する*i*-subject - 「部分」の名

詞句 - が、意味的制限やFOCUS機能に関して、他の場合と異なる特徴を示すというものであった。

最後にその他の特徴として、i-subjectが主語である場合にみられる特徴をみてみる。ここでは不定詞句化におけるi-subjectの振る舞いの違いと、「人」の状態文においてのみ見られる客辞の問題について触れる。

3.3.1 不定詞句化

スワヒリ語の不定詞は、動词语根に不定詞接頭辞 (infinitive prefix) ku- を付けてつくる。不定詞を用いて不定詞句を作るとき、意味上の主語は前置詞 kwa を伴って現れることができる。下の例は、a.の文で主語として現れる名詞句が、b.の不定詞句では前置詞 kwa を伴うkwa句に対応していることを示している。

(54)a. Juma a-li-piga mbwa. 「ジュマが犬を殴った。」
i i 殴る 犬

b. Ku-piga mbwa kwa Juma 「ジュマが犬を殴ること」
殴る 犬 of

(55)a. Mama a-na-teka maji. 「お母さんが水を汲む。」
i i 汲む 水

b. Ku-teka maji kwa mama 「お母さんが水を汲むこと」
汲む 水 of

LI文や「物」の状態文でも、下の(56)-(59)のように主語として現れるi-subjectが不定詞句のkwa句に対応することができる。

(56)a. Wanyama wa-me-lala mwitu-ni. (=5.a) 「動物たちが森の中で眠っている。」
動物 i i 眠る 森 L

b. Ku-lala kwa wanyama mwitu-ni 「動物たちが森で眠っていること」
眠る of 動物 森 L

(57)a. Nyoka a-li-toka nyumba-ni kwake. 「蛇が彼の家から出てきた。」
蛇 i i 出る 家 L his

b. Ku-toka kwa nyoka nyumba-ni kwake 「蛇が彼の家から出てくること」
出る of 蛇 家 L his

(58)a. Magugu ya-me-ota nji-ni. 「草が道に生えている。」
草 i i 生える 道 L

b. Ku-ota kwa magugu njia-ni 「草が道に生えていること」
生える of 草 道 L

(59)a. Maji ya-na-chemka birika-ni. 「やかんで水が沸いている。」
水 i i 沸く やかん L

b. Ku-chemka kwa maji birika-ni 「やかんで水が沸いていること」
沸く of 水 やかん L

これに対して「人」の状態文では、主語の位置にあるi-subjectは不定詞句内のkwa句として現れることができない。

- (60)a. Koo li-me-m-kauka Kurwa. 「クルワは喉が乾いている。」
 喉_i i j 乾く j
- b. *Ku-m-kauka kwa koo Kurwa
 j 乾く of 喉 j
- (61)a. Jasho li-na-m-toka Fuad. 「ファッドは汗をかいている。」
 汗_i i j 出る j
- b. *Ku-m-toka kwa jasho Fuad
 j 出る of 汗 j
- (62)a. Wasiwasi u-me-m-jaa Kijakazi. 「キジャカジは心配で一杯だ。」
 心配_i i j 一杯だ j
- b. *Ku-m-jaa kwa wasiwasi Kijakazi
 j 一杯だ of 心配 j
- (63)a. Fahamu zi-me-m-potea Doto. 「ドトは意識を失った。」
 i i j 失う j
- b. *Ku-m-potea kwa fahamu Doto
 j 失う of 意識 j

「人」の状態文で、主語であるi-subjectがkwa句として現れることができないのは、その状態の経験者である「人」が不定詞句内に現れているためである。それは、(64)のように「人」の名詞句がなければ、i-subjectがkwaを伴って現れることができることからわかる。

- (64)a. Ku-kauka kwa koo 「喉が乾いていること」
 乾く of 喉
- b. Ku-toka kwa jasho 「汗が出ること」
 出る of 汗
- c. Ku-chiririka kwa machozi 「涙があふれていること」
 滴る of 涙
- d. Ku-jaa kwa wasiwasi 「心配が一杯なこと」
 一杯だ of 心配
- e. Ku-potea kwa fahamu 「意識がなくなること」
 失う of 意識

このように、「人」の状態文のi-subjectは、不定詞句内に「人」の名詞句があると不定詞のkwa句に対応することができない。つまり、「人」の状態文に現れているi-subjectは、他の場合の主語として現れているi-subjectと同じように振る舞うことができないのである。これは、「人」の状態文のi-subjectには意味的制限があることと関連があるなど、単に統語的な問題ではないと考える。

3.3.2 客辞について

「人」の状態文は、客辞を義務的にとる点でも特異である。(1)a.-(4)a.のように、「部分」の名詞句が主語の時、その状態がみられる「人」は必ず客辞をとる。「人」は「物」の名詞句のように、locative markerを伴う形では表すことができないのである。

(65)a. *Koo li-me-kauka Kurwa-ni. (←1.a)
 喉 i i 乾く L

b. *Machosi ya-na-chiririka kutoka mtoto. (←4.a)
 涙 i i 滴る から 子供

また、同じ動詞であっても、「物」の名詞句では客辞をとることができない。

(66)a. *Maji ya-me-u-kauka mto. (←12.a)
 水 i i J 乾く 川 J

b. *Maji ya-na-i-chiririka ndoo. (←13.a)
 水 i i J 滴る ハケツ J

客辞については従来、「定」の目的語がとり得るものであり、目的語が TOPIC であれば客辞は義務的だと言われている。またスワヒリ語は、"human object"に限り「不定」であっても義務的に客辞をとることが特徴的だと述べられている (Givon (1976)、Wald(1979)、Allan(1983)参照)。Wald (1979) は、このような「人」の客辞をとる傾向の強さが、「人」の状態文にもあらわれているのだと述べている。

しかし、「人」の状態文であれば必ず「人」が客辞をとるというわけではない。例えば、下の例のchoka「疲れる」、pona「治る」などの動詞は、「部分」が主語で「人」が客辞をとるような文を作ることができない。「人」が主語として現れる文のみが可能である。

(67)a. *Roho yangu i-me-ni- choka.
 心 i my i J(1.s) 疲れる

b. Ni- me-choka roho yangu. 「私は心が疲れた。」
 i(1.s) 疲れる 心 my

(68)a. *Ugonjwa u-me-m-pona mtoto.
 病気 i i J 治る 子供 J

b. Mtoto a-me-pona ugonjwa. 「子供は病気が治った。」
 子供 i i 治る 病気

(69)a. *Homa i-me-m-poa mtoto.
 熱 i i J 冷める 子供 J

b. Mtoto a-me-poa homa. 「子供は熱が冷めた。」
 子供 i i 冷める 熱

(70)a. *Kichwa ki-na-ni- umia.
 頭 i i J(1.s) 痛い

b. Ni- na-umia kichwa. 「私は頭が痛い。」
 i(1.s) 痛い 頭

これらの動詞で「人」の状態を表す場合、b.のように、必ず「人」を主語にしなければならない。a.のように「人」が客辞をとる文が不可能なことをどのように考えればいだろうか。

その一つの結論として、動詞の階層性を考えてはどうだろうか。すなわち、「人」と「部分」のどちらの名詞句が主語になりやすいかという基準による階層である。「人」の状態文では、動詞によって「人」と「部分」のどちらの名詞句を主語にす

る方が自然かについて、一つの傾向が見られる。つまり、「人」が主語になる方が自然な動詞と、「部分」が主語になる方が自然な動詞が見られるのである。例えば次のような動詞は「人」が主語になる方が自然である。

- (71)a. Mama a-li-vunjika moyo. 「お母さんは落胆した。」
 母 i i 壊れる 心
 b. Mpenzi wangu a-na-nukia udi. 「僕の恋人はウディの匂いがする。」
 恋人 i my i 匂う ウディ
 c. Wafanyakazi wa-na-lowaa jasho. 「労働者達は汗だくだ。」
 労働者達 i i 濡れる 汗

逆に次のような動詞は、「部分」が主語になる方が自然なのである。

- (72)a. Roho i-li-m-pasuka mama. 「お母さんは心が張り裂けた。」
 心 i i j 裂ける 母
 b. Mguu u-li-ni- chubuka. 「私は足を擦りむいた。」
 足 i i j(1.s) 擦りむく
 c. Fikra namna kwa namna zi-li- m- enda kichwa-ni.
 考え i さまざま i j(3.s) 行く 頭 L
 「さまざまな考えが彼の頭の中でめぐっている。」

このことから、「人」の状態文に現れる動詞は、どちらの名詞句を主語とするかに関して、ある階層のようなものを成していると考えられる。そうすると、(67)-(70)にみられる動詞もその他の動詞と統一的にとらえることができるであろう。つまり、「人」の状態文に現れる動詞には、「人」を主語とする傾向の強い動詞と、「部分」を主語とする傾向の強い動詞があり、「人」が主語になる傾向の最も強い動詞として、(67)-(70)の動詞があるといえるのである。

(67)-(70)のような客辞をとらない動詞を考えるには、統語的要因よりはむしろ動詞の意味が関与的だと思われるので、以上のような動詞の階層性を考えるのが有益であると考えられる。

4. まとめ

以上、スワヒリ語にみられる主語交替現象がどのような場合に、どのような統語特徴に基づいて起こる現象なのかを考えた。そしてさらに、「人」の状態文がLI文や「物」の状態文と異なる点についてみた。結果をまとめると以下のようになる。

スワヒリ語の主語交替現象は、「人」や「物」の状態文とLocative inversion文においてみられる。この現象がみられる動詞は必須項を一項だけとる一項動詞であり、また、ここでi-subjectと呼ぶ名詞句 - 「人」や「物」の状態文では「部分」の名詞句、LI文では動詞の状態がみられる対象物 - が、その形を変えないで、主語の位置と動詞の直後の位置を交替していることが観察される。このことから、主語交替現象は、unaccusative動詞においてunaccusative objectと考えられる名詞句(i-subject)が、主語の位置と動詞の直後の位置の両方に生起し得るために起こ

る現象だと考える。

ところで、「人」の状態文には「物」の状態文やLI文とは異なる特徴的な点が見られる。「物」の状態文やLI文のi-subjectには意味的な制限はみられないが、「人」の状態文では人の譲渡不可能な所有物でなければならないという制限がある。また、「人」の状態文のi-subjectだけが、関係節のheadとして抜き出すことができる。これは、他のi-subjectにはある FOCUS としての機能に欠けているためである。他のi-subjectは FOCUS として提示されているものであるが、「人」の状態文ではそのように提示されているのではなく、あくまでも「人」の状態を表す文における補助的な役割を果たすものに過ぎないのである。そのため「人」の状態文のi-subjectは、その意味的、統語的役割において、他のi-subjectとは異なった特徴を示すのだと考えられる。

また、不定詞句において「人」の状態文のi-subjectがkwa句に対応することができないことや、客辞をとることができない、つまり、必ず「人」が主語でなければならない動詞があることに関しては、統語的要因だけでなく動詞や動詞句の意味に関係する問題があると考えられる。「人」の状態文にあらわれる動詞が、主語になる名詞句（「人」か「部分」か）を基準に一つの階層を成すのではないかという考えも、意味に関する考察の一つである。しかしここでは、スワヒリ語の主語交替現象に関してその統語的要因を検討することが主な目的であったので、それ以上の意味的考察は行わなかった。意味的談話的要因を含めた包括的な記述を今後の課題としたい。

註

* 本稿は、京都大学言語学懇話会第7回大会（1991年12月7日、於京大会館）において口頭発表したものに修正を加え、発展させたものである。

インフォーマントとして、大阪外国語大学の客員教授であるSaid Ahmed Mohamed 先生とRahma Mohamed Seif先生に御協力いただきました。（共にタンザニアのペンバ島出身でスワヒリ語が母語。）また、本号の編集委員である菅原睦氏には、本稿の執筆にあたり様々な助言をいただきました。ここに記して感謝の意を表する次第です。

- 1) 指標 i は主格接辞 (subject prefix、以下、主辞と呼ぶ) 及びこれに一致する名詞句を、指標 j, k は対格接辞 (object prefix、以下、客辞と呼ぶ) 及びこれに一致する名詞句をそれぞれ示す。（また、スワヒリ語の文の形が異なることを表すために、日本語訳を多少無理のある形に変えてある。）

主辞に後続する接辞は時制辞 (tense prefix) である。本文中にみられる時制

辞は概略、次の通りである（本文中ではグロスは省略）。

- me-（完了）
- li-（過去）
- na-（現在）
- ku-（否定辞と共起する過去）

また、例文中の略号は次の通りである。

- ST 状態形接辞 (stative suffix)
- PS 受動形接辞 (passive suffix)
- SB 接続法語尾 (subjunctive)
- L 「場所」を表す名詞接尾辞

- 2) スワヒリ語の名詞クラスの中には、「場所」を表すクラスが三つある。一般に、「特定の場所」（16番クラス）、「不特定の場所」（17番クラス）、「中」（18番クラス）と分けられている。各々の主辞は、pa-（16番）、ku-（17番）、m-（18番）である。
- 3) LIは、受動文においても見られる（本文(8)(9)の例）。これは後の2.3.1節で見られるように、一項動詞において主語交替現象がみられることを裏付けるものである。
- 4) 「物」と「部分」という名称は適切でないかもしれないが、ここでは、動詞の後ろの位置にくるとき、locative marker を伴ってあらわれ得る名詞句を「物」、無標のまま主語と動詞の後ろの位置を交替する名詞句を「部分」と呼んでいる。
- 5) 「定」であれば、locative marker が不要でない場合もある。Scotton (1981, p.16) は、qualified NPであれば "mirror image transforms" が可能であるとして次のような例を挙げている。a. の例で、「物」である kichwa kizima（頭全体）が locative marker を伴わずに現れることが示されている。
 - a. Mvi zi-me-eneā kichwa kizima. 「白髪が頭全体に広がっている。」
 白髪i i 広がる 頭 全体
 - b. ? Mvi zi-me-eneā kichwa.
 白髪i i 広がる 頭
 - c. Kichwa kizima ki-me-eneā mvi. 「頭全体に白髪が広がっている。」
 頭i 全体 i 広がる 白髪
- 6) Belletti (1988) で使われている用語を借用した。厳密には指しているものは多少異なる。
- 7) Perlmutter (1978) では、Unaccusative Hypothesis（非対格仮説）が提案されている。自動詞は、最初の階層に置いて1（主語）だけを含む unergative 動詞（dance, laugh, etc.）と2（目的語）だけを含む unaccusative 動詞（exist, die, etc.）に分けられるというのが基本的な主張である。
- 8) Belletti & Rizzi (1988) では、イタリア語の 'preoccupare' クラスの心理動詞（主語が Theme（原因となるもの）で目的語が Experiencer（経験者）となる動詞）を分析し、基底では Theme が動詞の目的語の位置に生成されている構造、つまり、unaccusative な構造を提案している。そこでも同じような受動化の問題

が起こっているが、普通の受動文との違いをいくつか挙げて、'preoccupare' クラスの受動文は、"verbal passive" ではなく、"adjectival passive" であることを示している。ここでみているスワヒリ語の受動文も同じような "adjectival passive" だと考えることができる。

- 9) 厳密な意味では譲渡可能な所有物でも、身につけていて身体の一部のように考えられているものであれば、譲渡不可能な所有物とみなすことができる。つまり、「人」の状態を表すのに関与的なものであれば、譲渡可能な所有物でも i-subject として生起することができるのである。例えば(44.b)の例で、mkoba (カバン) は不可であったが、mifuko (ポケット) なら可である。

(44.b)' Yule mwizi a-me-tuna mifuko.
 その 泥棒 i i 膨れる ポケット

「その泥棒はポケットが膨れていた。」

Hinnebusch & Kirsner (1980) は、スワヒリ語の譲渡不可能所有 (inalienable possession) について考察し、それが人に関与的なものであれば現実には譲渡可能なものもあり得ると述べている。

- 10) ここでみる関係節は、Barrett-Keach (1985) が "tensed relative" と呼ぶ形のものに限っている。これは時制辞をもつ関係節で、関係辞が時制辞の直後に置かれる形のものである。なお、"tensed relative" の関係節化では、主語以外の名詞句を head として抜き出すとき、関係節内の主語の名詞句は動詞の後ろに置かれる。

- 11) 指標 r は、関係辞及びこれに一致する名詞句を示す。

- 12) もちろん、i-subject が主語の位置にあれば関係節の head として抜き出すことができる。

(48.b)' Unga u-na-o-bubujika kwenye gogo lile.
 粉 i, r i r 湧く の所で 丸太 あの

「あの丸太から吹いている粉」

参考文献

- Allan, K. (1983) "Anaphora, Cataphora, and Topic Focusing: Functions of the Object Prefix in Swahili", in I.R.Dihoff ed. Current Approaches to Africa Linguistics(vol.1), pp.323-335. Foris Publications.
- Ashton, E. O. (1947) Swahili Grammar, Longman.
- Barrett-Keach, C. (1985) The syntax and interpretation of the relative clause construction in Swahili, Garland Publishing, Inc.
- Belletti, A. (1988) "The Case of Unaccusatives", Linguistic Inquiry 19 : 1, pp.1-34.

- Belletti, A. & L. Rizzi (1988) "Psych-verbs and θ -Theory", Natural Language and Linguistic Theory 6, pp.291-352.
- Bresnan, J. & J. M. Kanerva (1989) "Locative Inversion in Chichewa : A Case Study of Factorization in Grammar", Linguistic Inquiry 20 : 1, pp.1-50.
- Givon, T. (1976) "Some constraints on Bantu causativization", in M. Shibatani ed. Syntax and Semantics 6, pp.325-351. Academic Press, N.Y.
- Johnson, F. (1939) A Standard Swahili-English Dictionary, Oxford University Press.
- Hinnebusch, T. J. & R. S. Kirsner (1980) "On the inference of "Inalienable possession" in Swahili", Journal of African Languages and Linguistics 2 : 1, pp.1-16.
- Hyman, L. M. & A. Duranti (1982) "On the object relation in Bantu", in P. J. Hopper & S. A. Thompson eds. Syntax and Semantics 15, pp.217-239, Academic Press, N.Y.
- Kisseberth, C. W. & M. I. Abasheikh (1977) "The object relationship in Chi-mwi:ni, A Bantu language", in P. Cole & J. M. Sadock eds. Syntax and Semantics 8, pp.179-218, Academic Press, N.Y.
- Perez, C. H. (1983) "Locative pseudo-subjects in Shona", Journal of African Languages and Linguistics 5 : 2, pp.131-155.
- Perlmutter, D. M. (1978) "Impersonal Passives and the Unaccusative Hypothesis", Proceedings of the 4th Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society, pp.157-189.
- Perlmutter, D. M. & P. M. Postal (1977) "Toward a Universal Characterization of Passivization", Proceedings of the 3rd Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society, pp.394-417.
- Russell, J. (1985) "Swahili Quasi-Passive: the Question of Context", in D. L. Goyvaerts ed. African Linguistics, pp.477-490, John Benjamins Publishing Company.
- Scotton, C. M. (1981) "Extending Inalienable Possession: The Argument for an Extensive Case in Swahili", Journal of African Languages and Linguistics 3 : 2, pp.159-174.
- Wald, B. (1979) "The development of the Swahili object marker: A study of the interaction of syntax and discourse", in T. Givon ed. Syntax and

Semantics 12, pp.505-524, Academic Press, N.Y.

Whiteley, W. H. (1968) Some problems of transitivity in Swahili,
University of London.

----- (1970) "Notes on the Syntax of the Passive in Swahili",
African Language Studies 11, pp.391-404.

----- (1972) "Case complexes in Swahili", Studies in African
Linguistics 3 : 1, pp.1-45.

スワヒリ語資料

Abdulla, Muhammed Said (1968) Kisima cha Giningi (ギニンギの井戸) Evans
Brothers Limited, Nairobi.

----- (1974) Mzimu wa watu wa kale (先祖の霊) East African Literature
Bureau, Nairobi.

Adam, Adam Shafi (1978) Kasri ya Mwini Fuad (地主ファッドの屋敷) Tanzania
Publishing House, Dar es Salaam.

Farsy, Muhammad Saleh (1960) Kurwa na Doto (クルワとドト) East African
Literature Bureau, Nairobi.

Mohamed, Mohamed Suleiman (1978) Kicheko cha ushindi (勝利の笑い)
Shungwaya Publishers Ltd. Nairobi.

Taasisi ya uchunguzi wa kiswahili (スワヒリ語研究所) (1981) Kamusi
(Swahili-Swahili dictionary) Oxford University Press, Nairobi.

Wahab, Zainab B. A. (1975) Ulimbo (鳥もち) East African Literature Bureau
Nairobi.

(こもり　じゅんこ、　博士後期課程)